特集　地域の中の「コミュニティデザイナー」はいかに生まれるか

《3》横浜でつながりを創る人々に伺う

⑪ 世代を超えた結びつき～若い世代に引き継いでいく自治会活動
「自分に当たっていたスポットライトを他の人に当たるようにしてみませんか」

7階からの風景の衝撃

平成8年、渋谷から都筑区に引っ越してきました。綺麗で住みやすい街だと感じた一方で、住んでいるマンションの7階の窓から公園を見ていたのですが、段ボールが捨ててある日が多かったんです。よく見てみると滑り台で遊ぶため子どもたちがコンビニの倉庫から持ってきた段ボールをそのままにして帰っていました。自分の住む町が綺麗であってほしい、子どもをきちんとしつけたい。でも一方的に注意するのではなく「皆でどうするか決めたい」という思いで、たまたま高山自治会の総会があったので参加してみて、そこで問題提起しました。すると地域の方々から「私たちも何とかしたいと思っていました。でも言い出すきっかけがなかった」との声。それが活動の原点だったと思います。話し合いの結果、コンビニに対して倉庫に鍵をかけてもらうこと、子どもたちと付添のお母さんにはゴミを自分たちで持ち帰ってもらうことに決まりました。

他人任せでなく皆で決める

翌々年、順番で自治会の役員がまわってきたとき、会員の平均年齢が28・4歳と若かったこともあり、当時60歳に近かった私は「会長をやってほしい」と言われ、3年間のつもりで引き受けました。

3年が過ぎ、「ありがとう」とお礼を言われるわけでもない、もうやめたいという気持ちになっていました。ところが他の役員から「井上さんに是非やってほしい」と説得され、残ることにしました。その時、「自分の住んでいる所を良くしたい」と思っていた原点を思い出しました。お礼を言われるためにやっているわけではない。他人任せではなく自分がどうしたいのか、自分の問題としてとらえるようになりました。「自分のこころの向きを変えたことによって」不思議なことに周りから「ありがとう」という声が聞こえ始めました。一歩前進した気持ちになりました。

若い女性が互いに思いやりながら活躍できる自治会

高山自治会は子育て世代の多い地域です。役員は一年交代の輪番制のため、自然と子育て中の若い女性が多くなります。役員の役割決めは、前年の副会長と当年の役員が話し合いで決めることにしました。女性同士、出産直後であったり、妊娠中であったりと様々な立場を思いやって役職を決めていました。私にとって不平等と感じる分担でも彼女たちからは不満が出ません。皆でお互いに配慮し合い、納得する決め方をしていたのです。ある年には役員3人が出産したこともあります。子連れで役員会への出席は当たり前のことです。

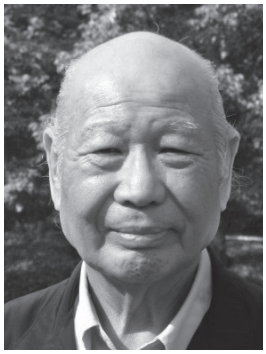
役員を経験した若いお母さんに「地域のことを何もわからないで入ったけれど、色々なことがわかったし、友達もできました。何かあればお手伝いします」と言ってもらえます。前年の役員には手伝ってほしいと声掛けすることをルール化しています。

今では自治会員の3分の1以上が役員経験者となりました。輪番制という一見弱点に見える制度ですが、それを積み重ねてきたことで、自治会の応援者が増え逆に力となることがわかりました。

最近は現役世代の男性も役員になるようになり、男女比が半々ぐらいになってきています。会議や運営の方法も自然と変わってきています。こういう運営形態でやらなければならない、という慣例にこだわる必要はありません。

相手の良いところをほめる

女性が多い自治会ですが、初めのうちは接し方もわかりませんでした。自治会でもまれるうちに、女性同士の井戸端会議に参加できる余裕も出てきました。相手の欠点ばかり見える傾向があったのですが、良いところを見るように努力しました。言葉でほめるのは苦手だったのですが、だんだんと自然体で、人を支え応援できるようになってきました。



井上　晴彦 さん

1998年より都筑区「高山自治会」会長。2008年には市営地下鉄グリーンラインの開通にあわせて「川和地区連合町内会」から新しく「ふれあいの丘連合自治会」を設立し、2015年5月まで会長を務めた。

聞き手

山口　宣子
都筑区地域振興課地域力推進担当係長

武智　勇人
都筑区地域振興課地域力推進担当

瑞岩　利恵
都筑区地域振興課地域力推進担当（地域元気推進員）

また、大勢の前で時間内に説明する訓練は組織人として受けてきましたが、〝自分の言葉〟で話すということができていなかったようです。あるとき「井上さんの話はわからない。井上さん自身が心の中でどう思っているのか、見えてこない」と言われたことがありました。そんなつもりはなくても「上からの目線で話している」と思われていたのです。そこで、ありのままの自分で勝負しよう、と思うようになりました。

以前は都筑区全体をどうしたらよいかという大所高所の視点から考えていましたが、今は逆に、身近な人と心を通わせるコミュニケーションが、実は一番大切だと考えるようになりました。地域でも、家庭でも親子でも「相手の話を聞き、語る」機会ができていること、それができなくて天下国家を論じて何になるのかという思いにいたりました。

子連れでも参加できる役員会

具体的な行動から広がる新しいつながり

市営地下鉄グリーンラインができてしばらくすると、ふれあいの丘駅周辺に若者たちが集まって騒ぐという迷惑行為が発生しました。そこで「ふれあいの丘地区防犯・地域元気づくり協議会」を立ち上げ、地域で防犯パトロール隊を始めました。4か月目で若者たちはいなくなりましたが、警察、小中学校、PTA、地区センター、地域住民の有志の皆さんの協力で、パトロールは続けています。再発の抑止効果がありますし、地域の元気づくりにも寄与しています。今年の春からは、パトロールとウォーキングをあわせた新たな企画「ふれあいウオーク」を実施しています。都筑区内の緑道を楽しみながら自分の健康のために歩き、ほんのちょっと地域の安全についても意識していくイベントです。

住みやすい、住んで良かったと思える街を作り、継続させるためには、思いとともに具体的な行動を伴った活動が必要です。その活動の責任者を自治会役員経験者にやってもらうことでつながりができていきます。防犯パトロール隊長も役員だった方に声をかけてやってもらっています。そこからさらに新たなつながりも広がっています。

「何かあったら、相手を説得するから声をかけて」と言ってもらえることもあります。

つながりを作っていこうと意識したことはないのですが、自分が努力している姿と、どのような考え方でやっているかを見せているうちに、結果的につながりができていました。

状況変化に合わせた自治会で世代を超えたつながりを

ある講演会で、「世の中が変化していく中で、変わっていないのは自治会町内会だけです」という話を聴きました。確かに、自治会活動に決まったやり方はありません。地域ごとの状況の変化にあわせてどんどん変えていくべきだと思います。

高山自治会は現役世代が多く土・日以外は人がなかなか集まりません。分譲マンションも増えてきて、若い人と高齢者、女性と男性との間で軋轢が起きることもありますが、一緒に活動していく中でお互いをだんだんわかってきます。年齢、性別の枠を越えて理解が生まれていくのを目の当たりにすると、とても感動します。

ここ何年かは会長として、次の世代へどう引き継ぐかを常に考えながら行動しています。役員経験者がデータやマニュアルをきちんと残しているので、私がいなくても回るような自治会運営になっています。70代と若い世代とでは役割が違います。その役割を意識して若い住民をとりこんで一緒にどうやっていくのか考えていくことが大切です。自分に当たっていたスポットライトを他の人に当たるようにしてみませんか。

私自身は、つどいや会合、行事に参加し多くの人と関わる中で、ありがたいことに次へ挑戦する気力や若さをもらっています。

戸建とマンションが混在する高山自治会

16年間自治会活動をやっていますが、「すべてわかった」とか「必ずこうすべきだ」と言い切れるものはありません。今でもやっていく中で試行錯誤しながら手探りの状態です。毎年やり残したことがありますが、時間をかけて解決していくのが地域なのかもしれません。

【インタビューを終えて】

自治会役員は高齢男性という固定観念にとらわれず、若い女性にどんどんやらせ、やりやすいように運営を任せる。次世代を育てるという役割を認識し、人として平等に接し互いに理解しあおうとされている温かい眼差しが印象に残りました。（山口）

高山自治会の若い役員の活躍について、目を細めながら語られる姿が印象的でした。（武智）

無知の知、色即是空という言葉が浮かんだ。常に新しいことを探して慢心せず、勉強を続ける姿が旧態依然と呼ばれる自治会活動に新しい風を吹かせているのではないでしょうか。（瑞岩）